

告白  
こくはく  
KOKUHAKU PRODUCE!  
プロデュース!

だい こく や「代告屋」とナゾだらけのいらいにん依頼人!?

とお や  
十夜 / 原作

なお  
ココロ直 / 著

モゲラッタ / イラスト



KOKUHAKU PRODUCE! もくじ  
CONTENTS

プロローグ

003

だい わ だいこくや かつやく ゆうき  
第1話 代告屋の活躍と、勇気のプレゼント

- .....
- |   |  |     |
|---|--|-----|
| 1 | <small>いらい</small> <small>とつぜん</small><br>依頼は突然に | 008 |
| 2 | <small>おも</small><br>想いがあるなら                     | 035 |
| 3 | <small>むす</small> <small>ねが</small><br>結ばれる願い    | 058 |

だい わ だいこくや めいそう あ いらい  
第2話 代告屋の迷走と、からみ合う依頼

- .....
- |   |   |     |
|---|---|-----|
| 1 | <small>なつ</small> <small>で</small> <small>あ</small><br>夏の出会い    | 074 |
| 2 | <small>ふく</small> <small>ざつ</small> <small>いらい</small><br>複雑な依頼 | 094 |
| 3 | <small>しず</small> <small>おほ</small> <small>いわ</small><br>静かな大岩  | 120 |
| 4 | <small>けつ</small> <small>か</small><br>結果よりも                     | 148 |
| 5 | チェックメイト   | 181 |

エピローグ

195

四月しがつ

じゃあ  
決まり！

今日きょうから  
俺おれたち三人さんじんで  
「代告屋だいきや」だ！

俺おれたちは  
秘密ひみつの部活ぶかつを  
始はじめた

代理店だいりてん株式会社  
代告屋







依頼人が誰かに  
大切な想いを告白  
するのを手伝う



時には  
つまずいたりも  
したけど



力を合わせて  
解決してきた！



次はいつたい  
どんな依頼が  
来るだろう？



代告屋……？

誰にも知られず  
こっそりと

あなたの告白、  
代告屋が  
お手伝いします



【**第一話**】

KOKUHAKU  
PRODUCE!

**代**だい **告**こく **屋**や  
**の**  
**活**かつ **躍**やく  
**と、**  
**勇**ゆう **気**き **の**  
**プ**ぷ **レ**れ **ゼ**ぜ **ン**ん **ト**

# 1 依頼は突然に

一学期の期末テストが終わり、夏休みを目前に控えた私立陽路学園中等部の生徒たちは、どこか浮き足立っていた。

濃い緑の街路樹が並ぶ通学路を行く哀川裕の足取りも、どことなく軽かった。ユウにとっては中学生になって最初の夏休みだ。家でゴロゴロしてテスト勉強疲れを癒すのもいい。仲間内で遊びに行くのもいい。もうじき発売予定である好きな作家のミステリ小説の新作を読みふけるのもいいだろう。前髪が目にかかって邪魔になつてきたから、まずは美容院に行くのも手だ。やりたいたいことがいくつも頭を駆け巡る。

クラスのなかでも、落ち着いていてクールなやつ、という認識が定着しているユウだが、普段はあまり感情が顔に出ないタイプなだけであつて、休みとなれば普通にうれいものだ。

学校には、いつもの登校時間よりも三十分ほど早く着いた。今日は目的があつて早めに家を出たのだ。

「あいつら、来てるかな」



ユウは自分の下駄箱を開けた。そこで、見慣れないものを見つける。

(なんだこれ……)

それは、一枚の封筒だった。事務的な茶封筒のようなものではなく、知人同士で手紙を入れて送り合うようなサイズだ。

(まさか、不幸の手紙? ……なわけないか)

取り出してみると、クリーム色で特に柄もない封筒だったが、古紙のような質感に加工されたオシヤレなものだった。派手なデザインよりも趣のある質感を重視するタイプの差出人なのだろうか、などと推理しながら開いてみると、そこには一本のミサンガとメッセージカードが入っていた。ミサンガとは、刺繍糸を編みこんで作るプレスレットのようなものだ。願いをこめて身につけていると、切れた時に願いが叶う、というのが一般的な解釈で、願掛けのために手首や足首につけている人も多い。

紙には、短くメッセージが書かれていた。

「**哀川**くんとお友達の活動がうまくいきますように。——**津麦** 紬」

「……ッ? ……ッ!? ……ッッッ!!」

ユウは、叫びそうになって口を手で押さえた。紬というのは、ユウが思いを寄せるクラスメイ



トなのだ。控えめだが芯の強さを感じさせる  
あの笑顔を思い出す。

(なんで津麦が？　なんで……!?)

ユウは怪しいものでも受け取ったようにそれをポケットに素早く忍ばせた。

ドキドキしながら教室に行ったが、当の袖はまだ来ていなかった。おそらく前日の放課後に下駄箱へ入れておいたものなのだろう。

机にカバンを置いて、事務室へ行って申請し目的の場所の鍵を借りると、また校舎玄関で靴を履き替えた。疑問とうれしきでふわふわした足取りだ。

目的の場所は、陽路学の敷地の端、木々の奥にひっそりと遺された木造の旧校舎だ。今は使われていない空き教室が、部員が少ない

文化部の部室として割り当てられている。

その二階にユウの所属する文芸部の部室があるのだが、実はこの文芸部は幽霊部員ばかりで、各々が勝手に活動しているようだった。漫画研究会などと兼部でこちらには籍を置いているだけという部員もいれば、噂では文芸賞に応募するほど本格派な部員もいるらしいのだが、ユウはまだ顔を合わせる機会すらない。

結果、人が寄り付かないこの部室は、紬のメッセーজカードにあった『哀川くんとお友達の活動』の拠点兼たまり場となっている。つまり、『代告屋』の活動拠点なのである。

気持ちを落ち着けるために大きく呼吸しながら二階への階段を上がると、廊下の奥から二番目のドアの前で、二人の男子生徒が待っていた。

「俺が最後か。おまたせ」

「もおく、遅いよ、ユウ〜！ 自分でミーティングしようって言っただんじやんよ〜」

べたりと床に座っていたところでユウの姿を認めるなり立ち上がったのが、ゼンこと黛善宗。開口一番に不満を漏らしながら、駆け足で近寄ってきた。

ねこつ毛の小柄なメガネ男子で、いつもシャツの上に黄色いパーカーを着ている。何かこだわりがあるのか、この暑い季節でも薄手のパーカー姿を貫いている。人懐っこい性格で、ユウにと

つてはケンカとも言えないじゃれあいを繰り広げる相手だ。

「別に約束の時間には遅れてねーだろ、ゼン。あと、おまえは朝から元氣すぎんだよ」

「ユウが低血圧なだけっしょ？」

「別に血圧は普通……っつて、腕、引つ張んなよ。今開けるから」

ユウは、ドアの向かいの壁に背中をもたれかけさせていた長身の男子、リヨウとも視線で挨拶を交わす。ゼンに急かされるまま部室の鍵を開け、室内に入る。空気を入れ替えるために窓を開けている間に、ゼンとリヨウも長机に向かい合う形で椅子に腰かけていた。この二人は文芸部員ではないが、よくここに集まるうち、自然と定位置が決まっている。

同じく椅子に座ろうとしたユウだったが、リヨウが机の上に置いた小さな段ボール箱に目を留めた。どうやらリヨウの荷物らしく、箱のふたが開いている。というか、ふたを閉められないようだ。その中には山のような数のミサンガがあふれていた。

「え、こ、こつちもミサンガか？」

「こつちも、つて何さ？」

「い、いや。なんでもない」

首をかしげるゼンに、ユウは慌てて目をそらした。





「これ、例れいによって女子じよしたちからリョウへのプレゼントなんよね」

「……こんなに？」

「他校たこうの子こからのもあるからね。これ、ぜくぜくんぶ下駄箱げたばこに詰めこまれてたんだってさ」

軽く見積もつても二百本はありそうだ。

当人であるリヨウは、ゼンの前で困ったように笑っている。

リヨウ。名前は相模稜。なんでもこなせる長身のイケメン。しかも相手の気持ちに配慮できる大人な性格とあつて、想像を絶するほどモテる。そんなリヨウのことを、「不公平のかたまり」と評するゼンだが、その顔はいつもなぜか自慢げだ。

「というか、リヨウ。おまえどうしたんだよその手首。部活でケガでもしたのか？」

リヨウの両手首には、包帯が巻かれている。剣道部のエースで、夏休みには大会が控えているとあつて、激しい稽古で痛めでもしたのだろうかとうウは驚いた。

だが、リヨウはその手を振つて否定した。

「違うんだ。こんなにたくさんさんのミサンガは巻けないだろ？ かといつて一本だけ巻いたら他の子に悪いしね。しょうがないから、手首をケガしたつてことにしたんだけど……」

「オレのアイデアだよ☆ ほめてほめて！」

ゼンが胸を張るが、ユウはため息をついた。

「これじゃあ、心配した女子から追加で回復祈願のミサンガが届きまくるだろ。それに、いつまでもケガしたふりじゃ押し通せないつての」

うなずきながら、「そうなんだよ」とリョウも困っている。

「え、ダメ？　じゃあ、全部つけちやう？」

「このミサングを全部つけたら、さすがにおれも竹刀が振れなくなる」

リョウの言葉に、ユウはリョウのその姿を想像し、肩をすくめた。

「じゃあリストバンドは？　それならいいじゃん！」

「うん。不自然に見えないかな？」

二人の会話に、ユウは割って入った。

「初めからひとつもつけなきゃいいだろ。気を遣いすぎなんだよ。だいたいなんでこんなにミサ

ングばかり届いてるんだ？」

「それ！　それなんよ、ユウ！」

ゼンが、ユウを両手で指さす。

「な〜んか最近校内で流行ってるのよ、これ」

「流行ってる……。なるほど……」

「知ってた？」

「い、いや。そういうえば、手首に巻いてるやつを最近よく見るな」

夏服なつふくになつて袖そでが短みじかくなつたせいで、より目立めだつようになつたのだろう。

「しかもね、どういうわけだか、自分以外じぶん以外で一番叶いちばんかなえてほしい願ねがいや達成たっせいしてほしい目標もくひょうを持つてる人ひとにもう一本ミサンガを作つくつてあげると、自分のお願ねがいも叶かないやすくなる、つていう噂うわさがオプシオンでついちやつてんのさ」

「え……」

「うちの学校がっこうから広ひろまつてるらしいよ」

ユウは、自分のポケットを押おさえた。袖そでがくれたミサンガがあるのを感じかんじて確たしかめる。

「え？ え？ じゃあ……津麦つむぎにとつて一番叶いちばんかなえてほしい願ねがいって俺おれの……」

ユウは心臓しんぞうのドキドキと焦あせりが顔かほに出でないよう、全力ぜんりきでポーカーフェイスを作つくつた。心こころの中なかでは小さいユウが集団しゅうだんで暴あばれ回まわつてゐるが。

「いやいやいやいや、勘違かんちがいするな、俺おれ！ たまたまだ、たまたま！ 津麦つむぎは友達ともだちが多いほうじゃないから、他にミサンガをあげる人がいなくなつたんだよな。そうだよな！ それに、俺おれのつていうより俺おれたちの活動かつどうを応援おうえんしてくれてゐるわけだし。うん。そういうことだよな！」

ここで幸しあはせな妄想もうそうを全力ぜんりきでできないのがユウだ。

「でも、どうしよう、これ……。つけたらゼンやリョウから何か聞きかれるよな……。特にゼンは



絶対ツッコんでくる……)

結局このあと、あまりに流行りすぎたことで生徒間のトラブルが頻発してしまい、学校からミサンガ禁止のルールが言い渡されることを、今は知る由もない。

「まあ、これをどうするか考えるのは、あとにして——」

リヨウが巻いた包帯をほどきながら言う。

「代告屋のミーティングをしないか？ ユウ」

「そ、そうだな」

代告屋とは、ユウたち三人が行っている活動。正式名称は代理告白株式会社。学園非公式のク

ラブ活動だ。

活動内容は、『依頼人が誰かに大切な想いを告白するのを手伝うこと』。結成したのは春のこと

だが、すでに学園の生徒たち数人から依頼を受け、告白を成功させている。

一学期も残すところ十日ほど。ユウとしては夏休み期間中の活動方針などを決めておきたかつ

た。

「夏休みはどうする？ もし依頼が来れば、の話だけだな」

そう尋ねるユウに、リヨウが小さく手を挙げる。

「すまん、ユウ。おれは剣道の大会があるから、代告屋の活動を優先するのは難しいかもしれない」

「ああ、そうだったな」

リヨウの所属する剣道部は強豪で、リヨウは一年生にしてエースだ。夏休みに大会があるため、それに向けて集中稽古や合宿が組まれていると、すでに聞いていた。授業があるうちは活動日以外、自由に過ごすことができるが、夏休みになると連日稽古があるようだ。長期休暇なのに休みの日がないという逆転現象が起こる。

「大会のあとなら、代告屋に集中できると思うんだけど」

「そうか。じゃあ、それまでは何かあれば俺とゼンの二人で——」

「ユウ、ごめん！ オレも夏休みはムリ〜！」

「えっ」

ゼンの発言に驚いたが、ユウが反応するのと同時に、部室のドアがコンコンとノックされた。まさか文芸部の部長が来たのか、と三人は顔を見合わせた。部長ならわざわざノックをしないだろう。「どうぞ」とユウが声をかけると、ドアは軽くきしみながらスライドした。

「失礼します」

そこには、一人の女子生徒が立っていた。つやつやした長い髪を揺らすその女子生徒は、ゼンを見つけると気安く声をかけた。

「善宗さん。ごきげんよう」

「あり……？ あやのん！ どうしてこんなところに来たのさ？」

ユウが、ちらりとゼンに視線を向ける。知り合いか？ と目で質問すると、それを受けてか、ゼンがコホンとひとつ咳払いをしてから紹介する。

「一年C組の西園寺綾乃さん。西園寺財閥のご令嬢」

「へえ……」

財閥。今時そんなものが存在するのか、という認識しかないユウは別段驚きもしなかったが、ご令嬢というのは少し納得できた。いかにも手入れが行き届いていそうな髪と肌。ピンと伸びた背筋。どこか気の強そうな目。ユウがよく読む推理小説の登場人物のパターンでいけば、気弱で病弱な深窓の令嬢タイプと双璧をなす『いかにも』なお嬢様だ。

知り合いだというゼンに用事があるのだらうと思っていたユウだったが、予想は裏切られた。「代告屋さんというのは、こちらかしら？」

三人は立ち上がって、すぐに机の上を片付けた。ユウが入り口近くの椅子を引き、すすめる。

「俺たちが代告屋だよ。全員一年生だから、かしこまらなくていい。俺はB組の哀川裕」

「あら、そうですね？　ありがとうございます。ご紹介の通り、西園寺綾乃よ。苗字でも名前でも、お好きなほうで呼んでちょうだい。哀川さん」

「わかった。西園寺さん」

椅子に腰かけた西園寺さんは、物珍しそうにきよろきよろと室内を見回した。何がそんなに興味深いのか、目を輝かせている。

「ずいぶんと趣のある場所だね。こんなところが学園にあるなんて知らなかったわ」

この建物の古さに驚いているのだろう。お嬢様だというのなら、ギシギシと鳴る床など初体験なのかもしれない。

「木造の旧校舍なんだから、こんなもんだよ。掃除はしてるけど、古さばかりはどうしようもない」

ユウは苦笑し、続けた。

「それで、代告屋に用事ってことは、依頼なのか？」





話によれば、西園寺さんはゼンが代告屋の宣伝のため、友人や知人に一斉送信したメールを受け取ったのだという。

「告白の手伝いをしてくれる、ということが書いてあったけれど、本当ですか？」

「ああ。その通りだよ」

対応するユウの肩越しに、ゼンが興味深げな視線を向ける。

「意外。あやのんのお眼鏡にかなう男子って、どこの誰なんだろ？」

「……それは……」

西園寺さんは言いにくそうに目をそらし、もじもじと両手の指をからませている。

さすがにこういうことをあつさり言える人は少ないだろうと思い、ユウはゆつくりと次の言葉待った。その顔立ちから、気の強そうな子だなと先入観を抱いたことを心の中で取り消そうとしていたその時。想像とはあまりにも違う言葉に、耳を疑うことになった。

「告白の相手は……その、男性でなくてもいいのかしら」

「……え？」

ユウが言葉を探していると、その後ろからゼンが「もちろん、おつけ」と両手の指で丸をふたつ作って返した。リヨウもほほ笑んでうなずいている。